学校での「埋活」

五感をつかって感じよう！山梨の歴史

例えば縄文土器はさまざまな文様で飾られています。土器の細かい技巧を指先でなぞって、文様を付ける時の工夫を考えてみたり、土器の質感を楽しむこともできる体験はとても新鮮なもののはずです。また、土器の中を覗いてわかるオコゲの跡や底部を観察することで土器を何に使っていたが想像できます。手にとってはじめて発見できること。それが学校での「埋活」です。

case1 あけぼの支援学校　土鈴づくりのお手伝いをしました。

夏さかりの８月。あけぼの支援学校高等部の授業で埋活の授業支援を行いました。生徒は１年生～３年生の６名。授業では、縄文時代の土鈴づくりを体験し、粘土や砂にふれて、感触を確かめました。

授業のテーマは「昔と今」

ナベ、楽器などを縄文時代と現代を徹底比較しました。姿形は違うけれど、用途が同じで、縄文時代と現代がつながっていることがよくわかる授業です。

縄文土器の写真とナベの比較で土器とは何かを生徒に説明しています。

竹串で土鈴に文様をつけています。

土鈴を作ることで実感をもった学習

土鈴は生徒が主体となってつくりました。粘土の触観を感じながらの粘土練り、どんな道具でどんな文様ができるのかを確かめながらの施文など、それぞれの土鈴をつくり、焼成までを体験しました。

生徒の作った土鈴。時間はかかりましたが、とても個性的な土鈴ができました。

case2 御坂東小学校・白州小学校　土器の解説、拓本を体験。

御坂東小学校では学校の周辺に縄文時代の遺跡が広がっていて、小学校に通う児童は縄文土器を拾うなど、遺跡に親しむ環境です。一方、白州小学校は敷地に遺跡があり、学校が数多くの遺物を所蔵しています。

学校にある縄文土器を活用する

両校ともに縄文土器を触る体験と学校が所蔵する土器片を活用して土器の文様を紙に写し取る拓本体験をしました。拓本はしおりにして、朝読書の会などで使います。

こども達の視点

実際に土器にさわったこども達はどんな感想を持ったのでしょうか？

アンケートにはいろいろな感想がありました。

１年生　ひとつひとつもようがちがう
２年生　おもたくて、もようがいっぱいあっておもしろかった。
３年生　土で出来ていることがわかりました
４年生　面白い形をしていて、とても作るのが大へんそうでした。「なべ」のかいはつは、とてもすごいことというのがわかりました。
５年生　土でできているのに固かった。
６年生　ちゃんとした形の土器が持てて、かんどうした。わかった事は、こんな近くにいせきがある事です。

それぞれの学年で、それぞれの感想がありました。１年生から６年生まで、多かったのが、「重かった」「固かった」です。ホンモノの土器の持つ質感を五感を通じて観察してもらうことができました。

発掘調査の現場から

平成 29 年度の発掘調査について、
担当者に各発掘調査現場の特徴を聞きました。

酒呑場（さけのみば）遺跡

「酒呑場遺跡を調査しています」なんて言うと、お酒が好きな方からよく「お、いい名前だねぇ」と声を掛けられますが、“下戸”な調査員が担当いたしました。

酒呑場遺跡はこれまで４回の発掘調査によって、今から４０００～５５００年ほど前に営まれた、縄文時代の大集落遺跡であることがわかっています。

今回の調査で注目されるのが、縄文時代の竪穴住居跡から見つかった石囲炉です。５軒の住居から石囲炉がみつかり、当時の形のままで残っているものもありました。そのうちの一つが写真に挙げた７号住居のもので、炉石の角に小さな土器を置いています。火種などを入れたのでしょうか？また、完全な形の土器が３個いっしょに埋められた穴も発見されました。これは縄文時代のお墓かもしれません。曽利式土器（約４０００～４５００年前）の資料がたくさんみつかり、その時代のムラの様子が、よりはっきりと分かるようになってきたことは、今回の調査の大きな成果です。

７号住居の石囲炉

３つの土器がまとまって出土したようす

枇杷塚（びわづか）遺跡

前号で速報をお伝えした枇杷塚遺跡の発掘の全容が明らかになりました。

確認された遺構は、溝状遺構や古墳時代の竪穴式住居跡２軒など。遺物では古墳時代前期の大型土器片や中世の青磁片などが検出されました。

これらは、韮崎地域における古墳時代から中近世の生活が推測できる重要な資料のひとつとなります。この地点は古来より清里方面や諏訪方面に向かう分岐点となっており人々の動きや生活文化の流れが古墳時代前期から現代に脈々と続いていることも大きな特色となっています。

調査風景

甲府城下町遺跡

前号の特集では、江戸時代甲府の「水」に関する遺構を取り上げました。今号ではその続報をお届けします。

調査の後、建設が始まった公用車等駐車場は１月下旬に完成しますが、駐車場の南西側（橘児童公園側）に看板が設置され、前号で取り上げた集水枡（しゅうすいます）と暗渠（あんきょ）について説明しています。

この２つの遺構は、甲府城下町のまちづくりを考える上で特に重要であると判断し、工事で壊されることなく、看板の下に埋まった状態で保存されています。近くを通った際、ぜひご覧下さい。

赤丸が看板設置箇所

中島遺跡・下河原遺跡

中島遺跡は平安時代、下河原遺跡は近世の遺跡です。国道の混雑を緩和する目的で、新しい道路を建設するために発掘調査が行われました。４～５月に試掘調査を行って、７月25日（月）～９月８日（金）に発掘調査という緊急対応でした。調査面積は、中島遺跡が約５４０㎡、下河原遺跡が約７７０㎡です。真夏の短期集中型の調査ということと、くだもの作りが一番忙しい時期ということもあり、発掘作業員さんが集まらずとてもたいへんでした。しかし、中島遺跡では、平安時代の甲斐型土器と呼ばれる土師器坏と甕の破片がたくさん発見されました。

下河原遺跡では、堤防跡の基礎になる石列が見つかりました。堤防には、造られる場所によって役目があります。発見された石列は、河川に沿ってつくられる堤防本体に対し、河川に向かって直角あるいは斜めにつくられ、水の流れる速度を遅くすることや、耕作地を保護するための「出し」いわれているものと考えられます。壊れて、一番下の石列しか残っていませんでしたが、人が一人では動かせないほどの大きい石でも、あっという間に壊されてしまう水の怖さが想像できます。

下河原遺跡の石列。右上の川と道路、石列の関係がわかる。

中島遺跡での甕の出土状況